

私市円山古墳の外表施設

北山大熙

2026年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

私市円山古墳の外表施設

北山大熙

1. はじめに

私市円山古墳は綾部市と福知山市の境界に所在する京都府内最大の円墳である。道路開発に伴って、古墳時代中期中葉の大型円墳であることが判明した。発掘調査の結果、外表施設には葺石を敷き、多量の埴輪を並べていたことが判明した。また、3基の埋葬施設からは多量の鉄製品が出土しており、中期を代表する古墳と評価された。これらの調査結果を受け、開発計画が見直され、現地保存となった。短期間で整理作業が実施されたため、報告書内では詳細な検討が十分に行われなかった経緯がある。その後、埋葬施設から出土した個別の遺物を中心に詳細な検討がなされてきたが、^(注1)大まかな全体図と部分的な平面図のみが報告され、遺構の詳細な検討はなされてこなかった。本論では、京都府埋蔵文化財調査研究センターに保管されていた遺構平面図および断面図をもとに、外表施設を中心とした詳細な検討を行う。

2. 調査・研究履歴

私市円山古墳は、現在の舞鶴若狭自動車道の道路計画に伴う遺跡分布調査によって、円山城館跡として埋蔵文化財包蔵地に登録されていた。調査の直前に、大型円墳であることが判明した。これまでに2度の発掘調査を実施しており、第1次調査では財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施し、第2次調査を綾部市教育委員会が行った。昭和62(1987)年に実施された第1次調査では、測量調査および5か所の試掘調査が行われた。その結果、私市円山古墳は三段築成の大型円墳であり、下段斜面を除く全面に葺石を敷き、南東部に造り出し部と埴輪列を備えていたことが明らかとなった。翌年には、前年度の試掘調査を拡張し、墳丘南東部を中心に調査し、葺石、埴輪列、造り出し部を確認した。さらに墳頂部では3基の埋葬施設の調査を行った。第1埋葬施設からは三角板革綴衝角付冑や三角板皮綴短甲、頸甲、肩甲、鉄剣、鉄鏃、胡籙金具など武具類や玉類や鏡などが出土している。第2埋葬施設からは、武具類、玉類、鏡類のほか、副室より農工具類が出土している。第3埋葬施設からは、武具類や農工具類がみついている。墳丘や造り出し部か

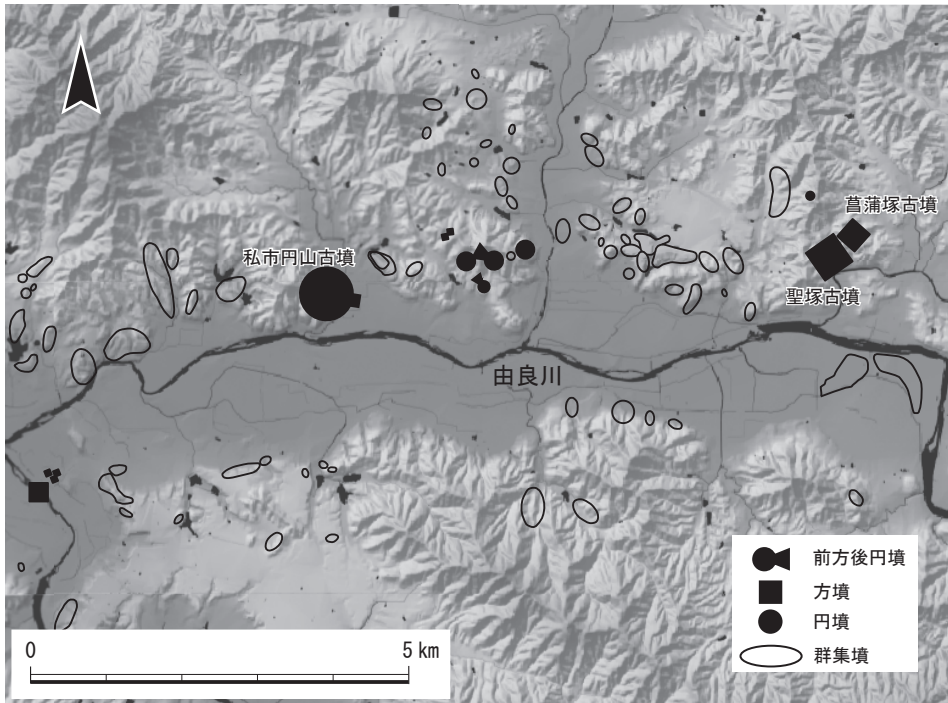


図1 由良川中流域の主要な古墳

らは普通円筒埴輪のほか、朝顔形円筒埴輪や家形埴輪、蓋形埴輪、短甲形埴輪が出土している。これらの成果を受け、関係機関及び地域住人の協力を得て、工法変更により現地保存されることとなった。第2次調査は、古墳全体規模の把握のため、実施された。墳丘の範囲、各斜面の基底部の位置、埴輪列・葺石の範囲などを確認した。^(注2)

以上の調査成果をもって平成6(1994)年には国史跡に指定される。これらの調査によって古墳時代の社会像を考える上で重要な成果を得たものの、報告書内での考古学的な検討が不十分であったことは否めない。その後、調査担当者を中心として、胡縁金具、甲冑、円筒埴輪、鉄製農工具などを中心に考古学検討を行った。^(注3)

以上の検討がなされているものの、詳細な遺構図面が世に不出のため、遺構に関する議論が行われていないのが現状となっている。そのため本論では、10分の1で図化されていた遺構平面図・断面図をもとに詳細な報告を行っていきたい。^(注4)

3. 私市円山古墳の墳丘

(1) 墳丘規模・形態

墳丘規模においては墳頂部中心から造り出し部における墳丘裾までの半径をもとに径71

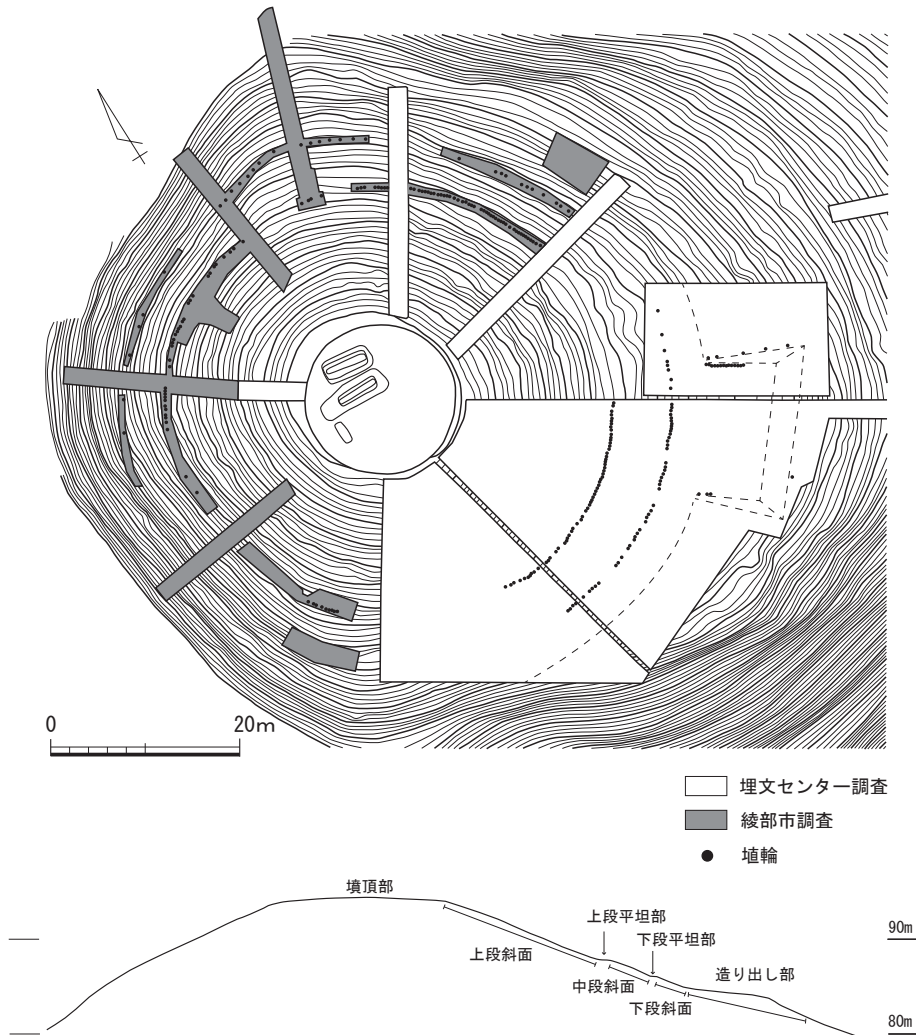


図2 私市円山古墳の測量平面・断面図

mと推定し、造り出し部を幅18m、長さ10mと報告されている。その後、綾部市教育委員会による墳丘北部の調査によって尾根の形状に併せて、不整形な円形を呈することが明らかとなり、径70mと報告されている。墳頂部は標高94.5m、造り出し裾部は標高81.5mを測る。また、造り出し部は、埴輪列をもとに平坦部が幅15m、長さ6.5mに復元できる。造り出し部南側斜面は崩落が激しく、埴輪列や葺石を検出できず、造り出し裾部を確定できる根拠が乏しい。墳丘斜面については南から南東部にかけて約20度前後の勾配の斜面と水平面を組み合わせしており、墳頂部以外は地山を切り出し、墳頂部に盛ることで築造している。北西部については、25～30度前後である。元々の地形を活かした築造方法を行って

いる。造り出し斜面は約25度前後の勾配をもつ。

(2) 葺石

葺石は墳丘の上段斜面・中段斜面、造り出し部斜面、造り出しと墳丘の接続部で検出された。墳丘部では、上段斜面の残りが良く、中段斜面では斜面裾周辺のみで部分的に残存していた。今回、遺構平面図の検討を行った墳丘南東部斜面では、総計4,643石以上の石材が図化されていた。これら大小様々な石材を遺構平面図より各面積を求めた。^(注5) 石材のうち、拳程度の50~100cm²を頂点とし、大きくなるにつれて数が減少する。全体の約95パーセントの石材が300cm²未満となる。300cm²以上の石材は235石のみである(図3)。これらを基準に本論内では葺石の300cm²未満のものを小型石材、300cm²以上のものを大型石材と定義する。多くの大型石材は斜面裾に置かれ、基底石として機能していたと考えられる。また、大型石材は上・中段斜面裾のほか、上段斜面の一部でも認められ、区画列石として機能した可能性がある。

上・中段斜面裾に置かれた大型石材は最大径30~50cmを測り、平面が長方形や正方形の形を呈する。墳丘斜面の一部では大型石材の長軸が斜面に対して横方向に置かれ、さらに

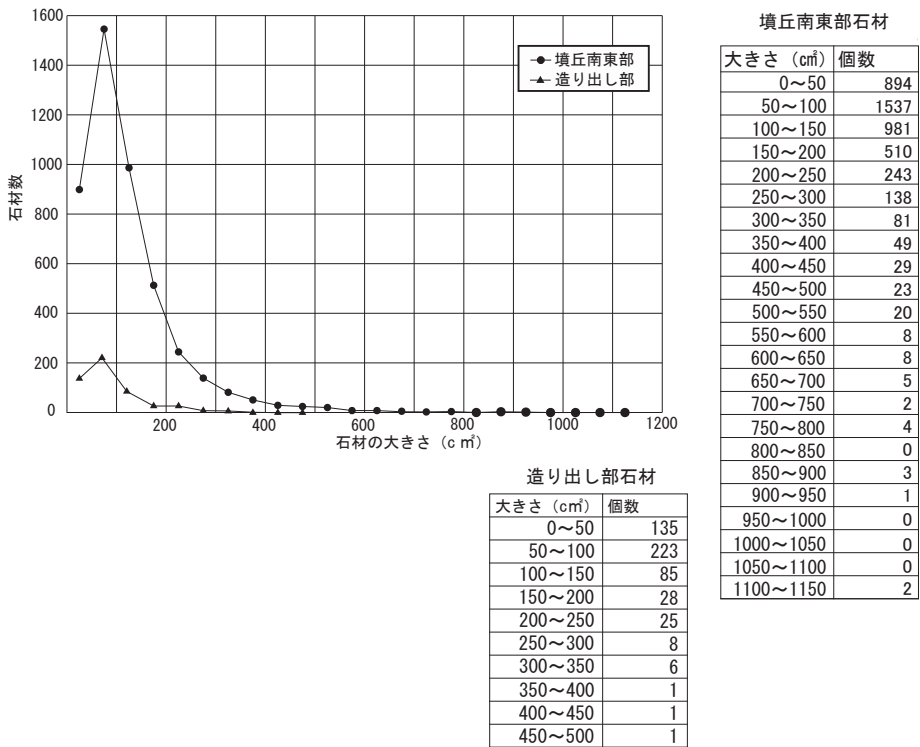


図3 私市円山古墳の石材の大きさ

同程度の石材を2～3段積み上げた箇所を確認できる(図4)。斜面裾の多くの部分では、複数の大型石材を積み上げず、一石の大型石材を配置する。その他の斜面の石材は最大径10～30cmを測り、大きさや形等にはあまり統一性がなく、大半の斜面には小型石材を設置している。斜面上にも大型石材が散見され、それらの5～6石以上が直線状に並ぶもの(図4・5)については区画列石の可能性があるものの、区画列石を境として、石材の積み方や大きさ等に明確な差異を読み解くことができなかった。

墳丘部に対して、造り出し部の葺石は、残存状況が悪く、数が限られる(図6)。総計530石のうち、拳大の50～100cmが最も多く、大半の石材が300cm未満に収まる。墳丘部と同様に約95パーセントの石材が小型石材となる。墳頂部の小型石材と比較するとより小型のものが多く傾向がある。大型石材は墳丘部との接続部の一部では、横方向に置かれ、墳丘と同一の指向で設置している。一方で、接続部の大半では大型石材が検出されておらず、多くの石材は崩落したものと想定される。また、造り出し部斜面裾では、基底石に該当する大型石材が検出されておらず、土砂の崩落に伴い、流されたのか、設置していないのかは不明である。

(3) 埴輪

埴輪列は上段平坦面と中段平坦面、造り出し平坦部・斜面裾で樹立が確認されている。多くの資料が原位置を保っており、良好に残存していた。上段・中段平坦部、造り出し平坦部では、樹立する際の掘り込み痕跡を検出しており、多くの円筒埴輪が樹立のために布掘りしていることが確認できる。布掘りの幅は様々であり、1条の布掘り内に円筒埴輪を2・3・4・6・7・15本と樹立している。布掘り内を各個体に合わせて、さらに壺掘り状に掘っている状況も認められる。基本的には、円筒埴輪の最下段突帯までが埋没するように樹立している。埴輪間隔は上段平坦部で30～50cm程度とかなり狭く、ほぼ隙間なく樹立する。下段平坦部では、埴輪間隔は狭いところで30cm、広い部分では1m以上を測り、バラつきがある。さらに、綾部市教育委員会の墳丘北部の調査では、下段斜面の埴輪間隔が1m程度離れており、隙間が空いた状態で樹立している。埴輪の配置は、古墳南側に位置する河川や平野からの視認性を意識して設計されたと想定される。

造り出し平坦部の埴輪列では、15本の円筒埴輪を一単位として、布掘りしており、埴輪間隔は0.3m程度で、隙間なく樹立されていた。しかし、造り出し斜面裾では埴輪列を検出できず、1.5m以上の間隔を空けて樹立しており、壺掘りによって樹立していたと想定できる。墳丘や造り出し平坦部の埴輪列とは樹立間隔が大きく異なる。

埴輪の総量については、比較的残りが良く、全体像を把握できている墳丘部分を検討する。上段平坦部の埴輪列の総距離が約150m、上段平坦部のうち、埴輪列の残りの良い、

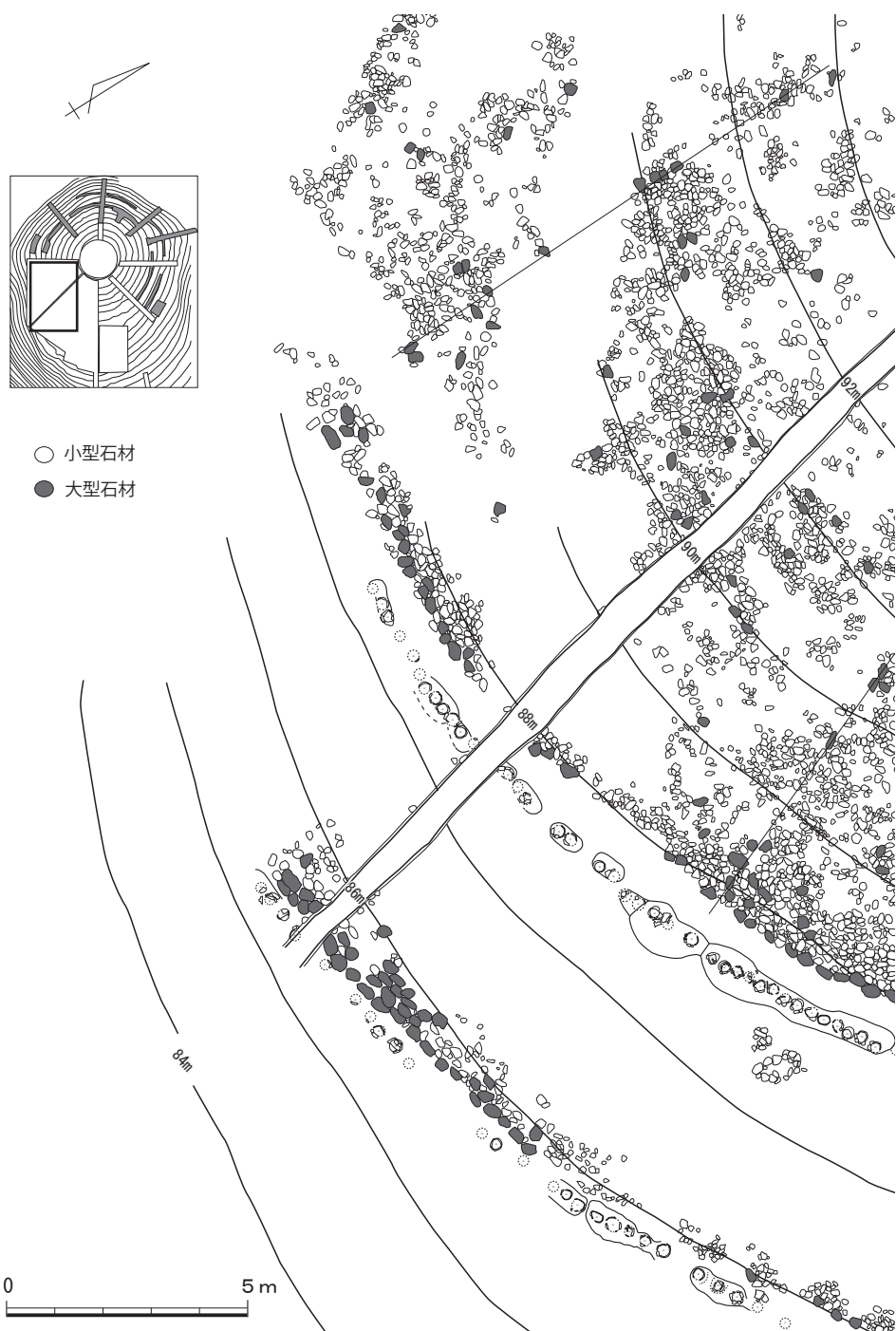


図4 墳丘平面図(南東部～南部)

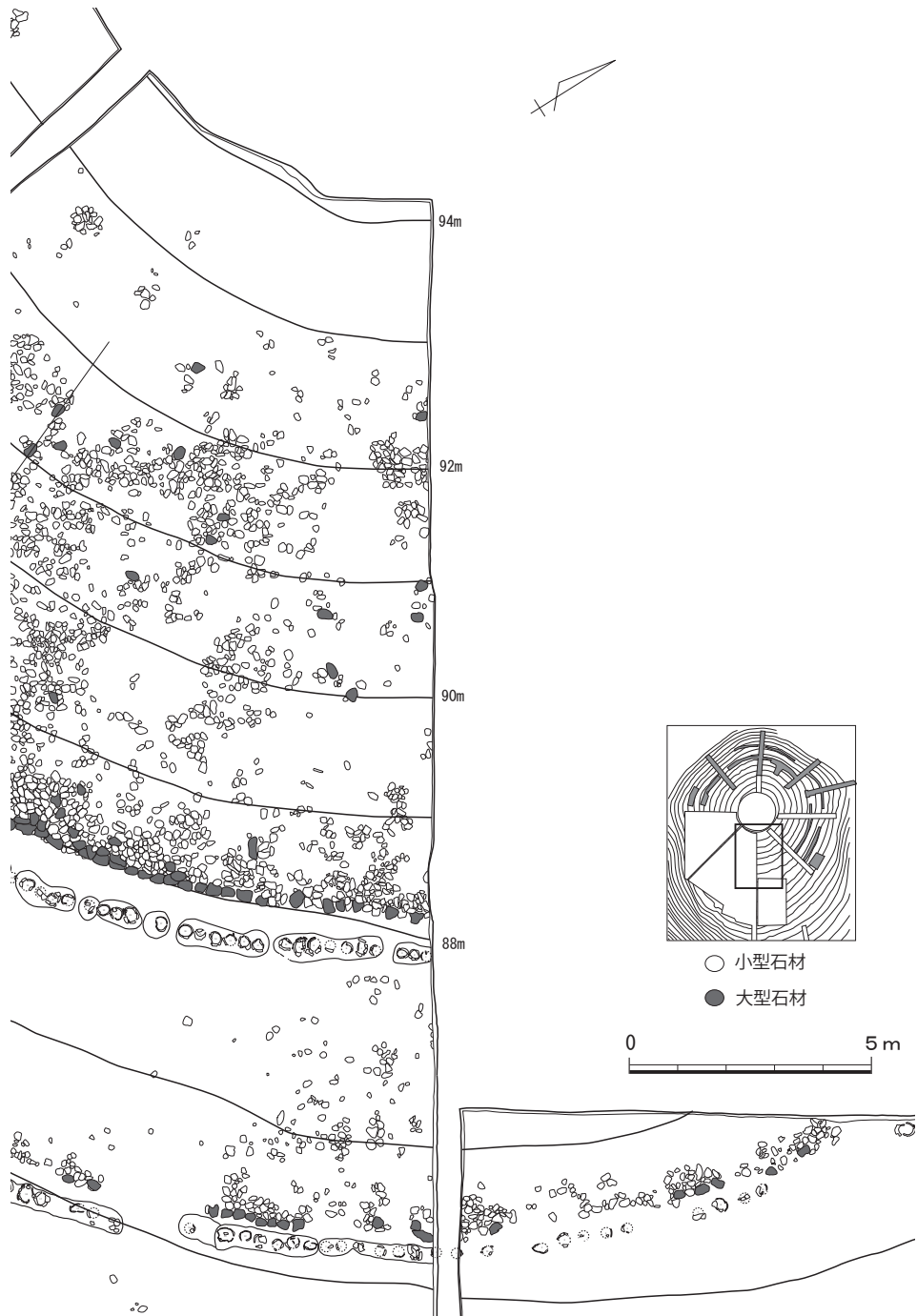


図5 墳丘平面図(南部～南西部)

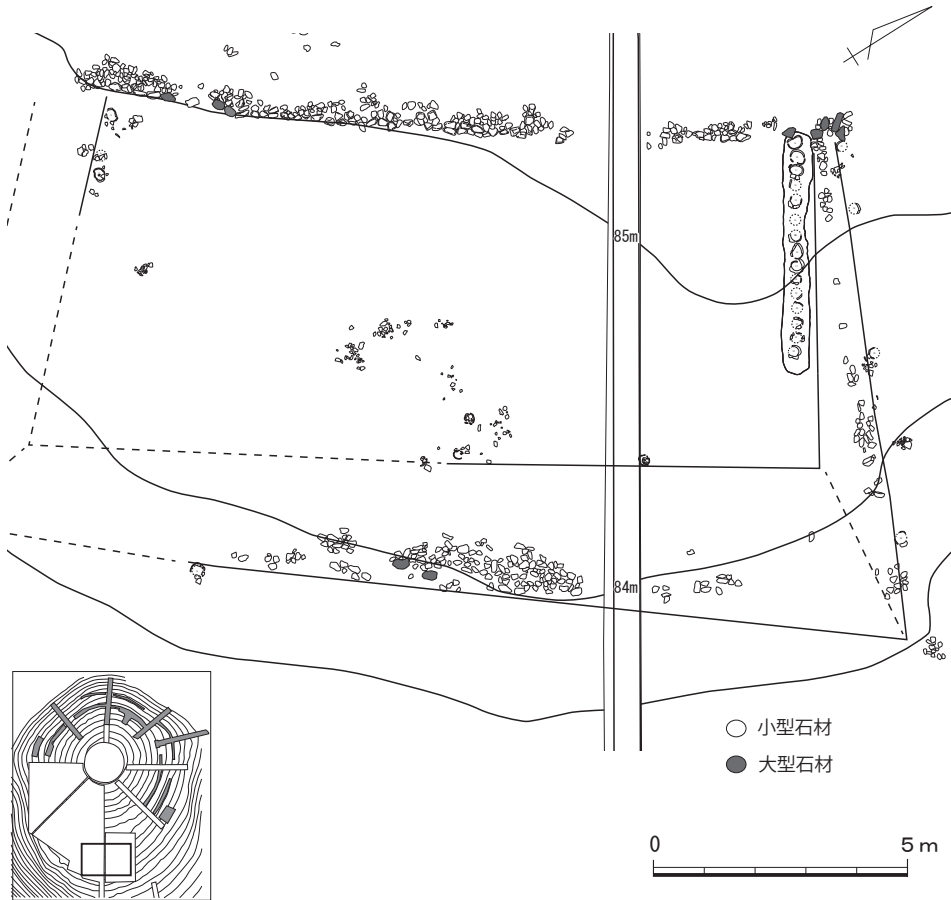


図6 造り出し平面図

埋文センター調査の範囲を参考にすると24.5mのうち、63本の円筒埴輪が樹立されている。その他調査区内でも粗密に大きな差がないと判断できれば、1mあたり約2.5本の円筒埴輪が並び、上段平坦部には約385本の埴輪が樹立されていたと想定できる。下段平坦部の埴輪列の総距離が約180mあり、広い範囲を調査した墳丘南西部から南東部では36.2mの距離内に55本の円筒埴輪が樹立され、1mあたり1.5本並ぶ。一方で、墳丘北部では18.7mの距離内に15本の円筒埴輪が樹立され、1mあたり0.8本が並び、粗密があることは上記で述べたとおりである。现阶段では、密な部分が埋文センター調査区のみと仮定すると、下段平坦部は約115本の埴輪が樹立されており、墳丘部に関しては約500本の円筒埴輪が樹立されていたと想定できる。

4. 周辺地域の葺石の積み方

ここまで私市円山古墳の葺石及び埴輪列について当時の遺構平面図から詳細に報告し、葺石の積み方や埴輪の樹立方法を報告できた。ここでは、私市円山古墳の所在する由良川流域の古墳を中心に、葺石の積み方を比較し、それぞれの特徴を明らかにしたい。由良川流域で葺石を敷く古墳は限られる。代表的なものとして綾部市の菖蒲塚古墳、聖塚古墳が挙げられる。両古墳は私市円山古墳の前段階、古墳時代中期前葉に位置づけされている。

菖蒲塚古墳は一辺約32mの方墳で、葺石を敷き、埴輪の出土が確認されている^(注6)。副葬品や埋葬施設の構造などは明らかになっていない。古墳周辺が発掘調査されており、造り出し部に加えて、さらに造り出しの基部に台状の張り出し部をもつ特異な構造をしている。

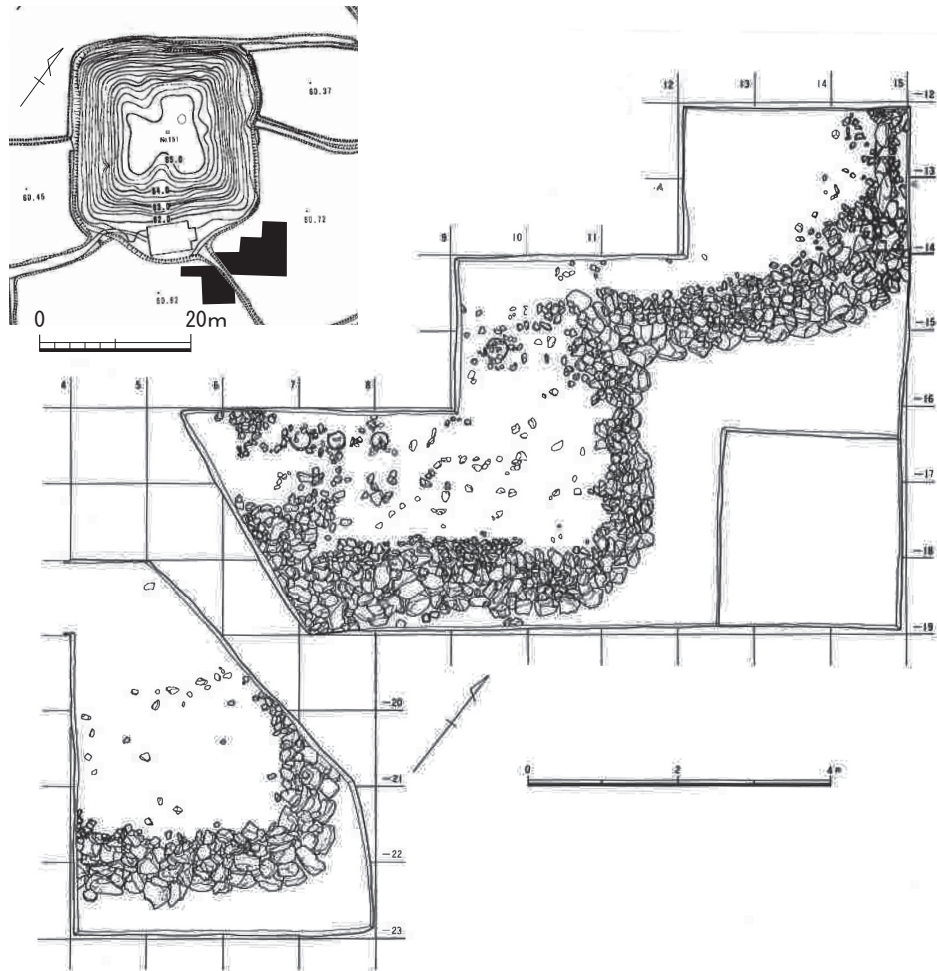


図7 菖蒲塚古墳の造り出し部

葺石は、墳丘南部に接続する造り出し部斜面、張り出し部斜面で確認される。斜面裾では多くが長径30cmの大型石材を設置する。多くの石材は長径・短径の差が少なく、平面正方形に近い石材が利用されている。長径と短径の差が大きいものについては、横づかいで設置されている。斜面には小型の石材を並べ、多くの小型石材は100cm未満の大きさのものが占める。屈曲部では、斜面の裾から上方にかけて大型石材を並べ、区画列石と想定できる。埴輪が原位置を保っており、掘形は検出されていないものの、埴輪間隔は約0.5mを測る。

聖塚古墳は一辺45～46mの方墳で、葺石を敷き、埴輪などの出土が確認されている^(注7)。仿製神獸鏡片や鋌留冑、革綴短甲、刀、剣、鏃などの鉄製品の破片がみつまっている。仿製神獸鏡片の推定製作時期や鳥舌鏃から中期中葉でも早い段階の副葬品組成として位置づけられている^(注8)。私市円山古墳と近い段階の古墳であることが明らかとなっている。斜面裾では長径30～50cmの大型石材が斜面に対して直行する横方向で並べられ、平面長方形の石材が多い。斜面には小型の石材を並べる。菖蒲塚古墳と比較して石材の大きさによる差異は少なく、多くの石材は100cm未満の拳大の大きさのものが占める。屈曲部では裾から斜面にかけて大型石材を並べ、区画列石として活用している。また、区画列石の隣接部分では、大型石材を基底石として置かず、斜面から裾部まで全面に小型石材内でも比較的大型

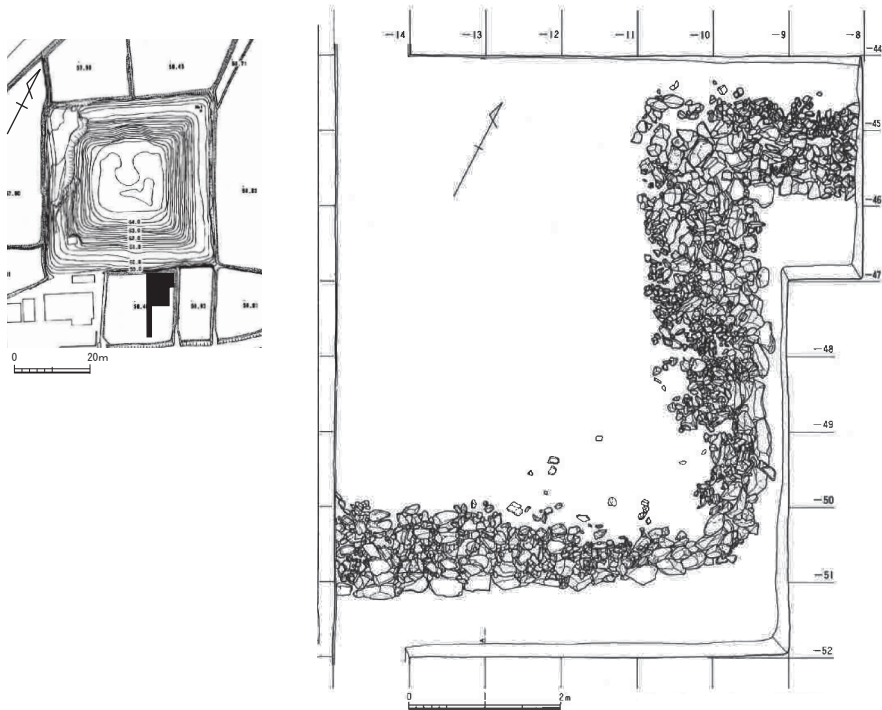
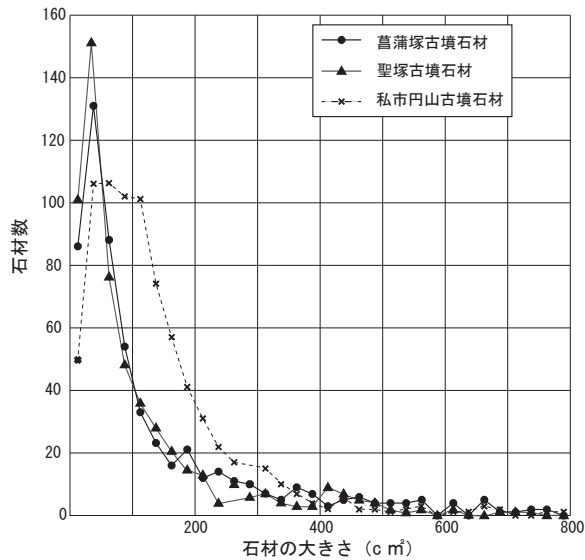


図8 聖塚古墳の造り出し部



菖蒲塚古墳石材		聖塚古墳石材		私市円山古墳石材	
大きさ (cm ²)	個数	大きさ (cm ²)	個数	大きさ (cm ²)	個数
0~25	86	0~25	101	0~25	50
25~50	131	25~50	151	25~50	106
50~75	88	50~75	76	50~75	106
75~100	54	75~100	48	75~100	102
100~125	33	100~125	35	100~125	101
125~150	23	125~150	28	125~150	74
150~175	16	150~175	21	150~175	57
175~200	21	175~200	15	175~200	41
200~225	12	200~225	13	200~225	31
225~250	14	225~250	4	225~250	22
250~275	11	250~275	10	250~275	17
275~300	10	275~300	6	275~300	10
300~325	7	300~325	7	300~325	15
325~350	5	325~350	4	325~350	10
350~375	9	350~375	3	350~375	7
375~400	7	375~400	3	375~400	4
400~425	3	400~425	9	400~425	2
425~450	5	425~450	7	425~450	6
450~475	6	450~475	5	450~475	2
475~500	4	475~500	4	475~500	2
500~525	4	500~525	2	500~525	1
525~550	4	525~550	1	525~550	2
550~575	5	550~575	2	550~575	3
575~600	0	575~600	0	575~600	0
600~625	4	600~625	2	600~625	1
625~650	0	625~650	0	625~650	1
650~675	5	650~675	0	650~675	3
675~700	1	675~700	1	675~700	2
700~725	1	700~725	1	700~725	0
725~750	2	725~750	1	725~750	0
750~775	2	750~775	0	750~775	1
775~800	0	775~800	0	775~800	1

図9 由良川中流域の葺石の大きさ

のものを並べており、他の部分とは異なる葺き方がされている。

各古墳の石材の大きさについて詳細を検討する^(註9)。各古墳ともに石材は50cm²より小型のものから800cm²に近い大型石材まで確認できる。割合でみれば、私市円山古墳では300cm²未満の石材が約95%を占める。一方、菖蒲塚古墳及び聖塚古墳では300cm²未満の石材が約90%を占め、やや大型石材を多用する傾向がある。また、大きな差異として菖蒲塚古墳及び聖塚古墳においては25～50cm²の石材が最も多く、それより大きい石は次第に少なくなる傾向がある。拳大から手のひらサイズの石材が全体の約60%以上を占めている。一方で私市円山古墳では25～50cm²、50～75cm²を最多とし、125cm²の石材までがほぼ横ばい傾向となっている。これらをまとめると、菖蒲塚古墳及び聖塚古墳では、小型石材の中でもより小さいものを多用しており、かつ、大型石材をより多く使用している傾向を読み解くことができる。視覚的には、大型石材が目立つような石材サイズを選択するようになっており、基底石がより目立つようにしたと想定される。

以上、由良川中流域内で比較すると大型石材を基底石・区画列石に使用し、斜面には小型石材を使用する。一部の基底石は横づかいする指向を読み取ることができる点など積み方等には差異を確認できない。大きさの詳細に着目すると、菖蒲塚古墳および聖塚古墳では、基底石や区画列石に用いられた大型石材がより目立つよう選択され、視覚的效果が高まっていると評価できる。

5. おわりに

本論においては、これまで提示されてこなかった遺構平面図をもとに葺石の施行方法や埴輪列の樹立方法について詳細を報告した。さらに周辺の葺石をもつ古墳と比較し、大きさによる選定基準の変化を読み解くことができた。同地域内での変化を時期的な変化と読むか、古墳の立地による差を読むかは今後の課題としたい。

私市円山古墳は開発に伴って発見され、短期間で発掘調査及び報告された。30年以上を経て、このように詳細な検討材料を提示することができた。調査当時を知る関係者からすれば報告不足である部分が多々あろう。しかし、本論の目的は、これらの成果を契機として丹波地域の古墳時代研究をさらに活発化させることであり、その意義は十分に果たされたものと考えている。

(きたやま・だいき = 当調査研究センター調査課主任)

- 注1 鍋田 勇・大崎康文・高野陽子・石崎善久1989「私市円山古墳」『京都府遺跡調査概報』第36冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注2 綾部市教育委員会1994『史跡私市円山古墳整備事業報告』
- 注3 鍋田 勇・石崎善久1989「私市円山古墳出土の胡籙金具」『京都府埋蔵文化財情報』第31号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、鍋田 勇1989「私市円山古墳出土の甲冑」『京都府埋蔵文化財情報』第32号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、鍋田 勇1989「私市円山古墳出土の円筒埴輪」『京都府埋蔵文化財情報』第33号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、松井忠春1991「私市円山古墳出土胡籙とその系譜」『京都府埋蔵文化財論集』第2集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、鍋田勇1991「鉄製工具・農具副葬の背景－丹後・中丹波地域を中心に－」『京都府埋蔵文化財論集』第2集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注4 本論では、墳丘、特に外表施設の議論に留まるものの、墳頂での埋葬施設に関しては2分の1で平面・断面が図化されており、出土状況が詳細に記されている。あらためて報告したい。
- 注5 各石材の面積は、米国立衛生研究所(NIH)によって開発されたパブリックドメインの画像処理ソフトウェアimagejを用いて計算した。石材が被りあっており、正確性の低いと判断できたものは除外したが、すべての石材が正確な数値を求められたものではない。
- 注6 中村孝行1984「聖塚・菖蒲塚試掘調査概報」『綾部市文化財調査報告』第11集 綾部市教育委員会
- 注7 前掲注6と同じ
- 注8 阪口英毅・下垣仁志・諫早直人・河野正則・川畑 純・金 宇大・土屋隆史・新宮領奏絵2013「綾部市聖塚古墳出土遺物報告- 京都大学総合博物館収蔵資料-」『古代学研究』第197号 古代学研究会
- 注9 各古墳の葺石の石材の大きさの割合を同条件で比較するため、私市円山古墳の葺石すべてのデータを使用せず、比較的残りがよい、上段斜面の基底石より斜面に向かって1.5mの幅のデータにて比較した。

【図の出典】

- 図1・3～6・9：筆者作成
- 図2：綾部市教育委員会 1994『史跡私市円山古墳整備事業報告』に加筆
- 図7・8：中村孝行 1984「聖塚・菖蒲塚試掘調査概報」『綾部市文化財調査報告』第11集 綾部市教育委員会

